

## 「チャペル受難の日～闘うキリスト者たち」

生江 有二 (1966年度法律学科卒)

チャペルをどうするか―学園民主化を命題に大学封鎖をしたものの、唯一といってよいほど手をつけていないのがチャペルだった。1968年のことである。入学式はチャペルだったが、それ以来何年もまるで無関係のようにチャペルは在った。だが、明学大全共闘は全学封鎖に決していた。すぐに飛んで行った行動隊からの報告が入った。チャペル正面の扉。堅牢とはいえない。が、太いカンヌキがかかっている。そんなもの丸太で突っ込んで粉碎すりゃいいんだ・・・勝どきのような拍手が湧いた直後のことだ。瘦せぎすのひとりの学生が立ち上がって叫んだ。

「待ってくれ。ここは私達闘うキリスト者同盟に任せてくれないか」

のちに知ったが、30名ほどの学生が集結する闘うキリスト者同盟＝闘キ同の結成はわずか数日前のことだった。すぐにメンバーのひとりが大きなノコギリを持ってやってきた。それを扉のわずかな隙間に差し入れ、一瞬躊躇した後、ごりごりとやりだしたのである。

祈りと行動。苦渋と決断。やがて扉は開き、数百の学生は一言も発せず、静かにチャペルに入っていった。小数精鋭の集団だった闘キ同はその後も苦悩に満ちたしかし、勇断を持って学園民主化に熱烈に加わっていった・・・。半世紀近く前のできごとだが、彼らが存在したことでチャペルの扉は今も何ごともないように静かに佇んでいる。